よりよい考えを求めることができる児童の育成

燕市立燕西小学校
教諭　霜鳥　一幸

Ⅰ　目指したい子どもの姿

自分の考えをしっかりと発表できる子ども、分かりやすく根拠を基に説明できる子どもの姿を目指した。今年度は、ただ発表する、説明するだけでなく、友達の考えと比べながら聞くことで、友達の意見に共感したり、違いを見つけたり、良いところを付け加えたりして「よりよい考えを求める」子どもの姿を期待した。これを研究のテーマとして、全職員で１年間取り組んだ。

Ⅱ　実践

上記の姿を具現するために、研修仮説を「児童の意欲を喚起する課題を提示し、関わり合い学ぶ場を工夫すれば、子どもは自分の考えを深め、よりよい考えを求めることができるだろう。」とし、校内研修で検証を進めた。３つの視点①意欲を喚起する課題の工夫②関わり合い学ぶ場の工夫③理解と意欲につなげる「まとめ」と「振り返り」を基に全職員で公開授業を実施し、検証を進めていった。

１　単元名　　５年生算数「単位量あたりの大きさ」

２　単元の目標

・平均の意味や使い方、表し方が分かる。〔B(3)ア〕
・日常の事象を数理的に捉えるために、単位量あたりの大きさで考えることができる。〔B(4)ア〕

３　授業の実際

①意欲を喚起する課題の工夫

	マット	人数
㋐	２枚	１２人
㋑	３枚	１２人
㋒	３枚	１５人

・今日は、平均をもとに**レベルアップ**した問題についてを考えます。
・次の表を見てください。（左の表を提示する。）
・㋐と㋑はどちらが混んでいると言えますか？（人数が一緒）
・㋑と㋒はどちらが混んでいると言えますか？（マットの数が一緒）

○では、㋐と㋒のこみぐあいはどのように比べたらいいだろうか。　**→ギャップをつくる。**

→前時までの学習をもとに、難しいが少し考えれば分かりそうな課題を「ギャップのある課題」と名付け、「意欲を喚起する課題」として全職員でその工夫について検証を進めた。

②関わり合い学ぶ場の工夫

○○○ ○○○	○○○ ○○○	
○○○ ○　○	○○○ ○　○	○○○ ○　○

ア１２÷２＝６
ウ１５÷３＝６

・まず、自分の考えをノートに書いてみましょう。
☆マット１枚分で考えればいい。
　ア→マット１枚で考えると６人になる。
　ウ→マット１枚で考えると５人になる。
・班で話し合いをします。今日は１番の人がリーダーになってください。
→３～４人の班をつくり、毎日交代でリーダーを決めて、司会をしたり全体で発表したりしていった。
・ホワイトボードを取りに来てください。自分の考えを図、表、式にして伝え合いましょう。

※一人一人自分の考えをミニホワイトボードに必ずかいて発表（説明）する。

☆今年度４年生以上の各クラスに、ミニホワイトボードを８セットずつ購入。
　これをコミュニケーションツールとして意見交換をしていった。
→ホワイトボードだと前の人の意見が消えてしまうので、A3 の用紙を使って、意見交換を行った実践もその後試みた。
→ツールだけでなく、人数や隊形なども実践を通して様々に変えて有効性を検証した。

③理解と意欲につなげる「まとめ」と「振り返り」

☆各班で話し合ったことを発表しましょう。
→各班で発表していく。これをまとめにしていった。

〇友達の意見、説明を聞いて「なるほど」と思ったことは自分の考えに付け加えていきましょう。

→式だけの人は図を付け加え、図や言葉だけの人は、友達が発表してくれた式を付け加えていった。
☆振り返りをします。友達と伝え合う活動でどんなことを思ったか、感想を書きなさい。

★自分一人では、比べることができなかったけど友達の考えを聞いて、どちらか一方がそろえば混み具合が比べられることが分かった。

Ⅲ　成果

①意欲を喚起する課題の工夫について

意欲を喚起させるためには、少し難しい問題が効果的である。これを「ギャップのある課題」としてどのような課題が有効か研修を進めた。前時までに習得したものをベースに振り返りながら、関連した課題に入ることで、子どもたちの意欲を喚起させていた。上記の実践で言えば、「あれ？アとイ、イとウは比べられるのに、アとウは比べられない！」「どうしてだ？」と疑問がわく。この疑問が意欲へとつながっていった。子どもたちの脳がアクティブに働き、この疑問を解決したいという意欲へとつながっていくことが、約２０の公開授業を通して明らかになっていった。

②関わり合い学ぶ場の工夫について

関わり合い学ぶ場の工夫には、２つの要因が非常に大切であることが分かった。コミュニケーションを取るためのツールと場の環境である。ツールとしては、ミニホワイトボードを活用して、自分の考えを説明する授業を繰り返した。これによって子どもたちは、発表すること、理由を必ず付けること、友達に分かりやすく話すことなどの力が付いてきた。また話すだけでなく、友達の考え、意見、説明がしっかりと聞けるようになった。これによって、着実に友達の優れた考えを自分の考えに付け加えたり、比べたりすることで友達にアドバイスできるようになった。

低学年では A3 の紙やノートを使って、コミュニケーションを図る実践も多かった。ホワイトボードでは友達の考えが消えてしまうという欠点を補う点で有効性が確認できた。実践を積み重ね、単元や場に応じて教師もこれらのツールを使い分けられるようになった。

コミュニケーションを取る人数は最高でも４人。これ以上では効果が薄れた。４人なら短時間で必ず全員が発表できた。隊形も重要で、国語か算数か、単元の内容でも隣の人と相談したり、立っていろいろな人と意見交換したりするなど、様々な工夫を試みた。教師も場に応じて様々な方法を取り入れた。

③理解と意欲につなげる「まとめ」と「振り返り」について

「まとめ」は子どもたちの考えをそのまま使うようにした。ホワイトボードをそのまま黒板に貼り、教師が色を変えて補足説明をしながらまとめた。時間の節約、子どもたちの考えがまとめになるので、自信につながるなど、良い点がたくさんあった。

振り返りでは、友達の意見や考えを意識させて、自分の考えに取り入れられたかどうかを確認していった。これを繰り返すことで、友達の考えを聞こうとする姿がたくさん見られるようになり、意欲へとつながった。低学年では、最初は〇△といった記号により短時間で振り返りをさせる実践が多かった。その後、そこに段々と理由を付けるなどしていき、次学年へとつながる振り返りとなった。

Ⅳ　課題

ギャップのある課題を提示する時に、前時までの復習を入れるので、時間がかかった。関わり合いの場面では全体のまとめ方で、班で一つの考えにまとめて発表させることが多く、まとめ方などで課題が残った。これらの検証を進めるために、来年度も、子どもたちがよりよい考えを意欲的にアクティブに求めていけるように、実践を重ねていきたい。